

江戸末期の日本語素描

—— 外國人の耳を通してみた ——

杉 本 つ と む

はじめに プラウンの『英和俗語文集』(S. R. Brown: Colloquial Japanese, or conversational sentences and dialogues in English and Japanese; Shanghai: 1863)の概観は別に發表する豫定なので今回は同書の會話・對話の部分を検討して江戸末から明治初年にかけての日本語の一面を考えていつてみたいと思う。プラウンが取り扱っている日本語は大凡そ江戸末の江戸で行われていたコトバと考えてよかろう。記載法からすると次のようになっている。

1. A bow-knot is easy to untie.

Hi-za o-ri ni mu-sz-bu to to-ke ya-sz-u go za-ri-ma-s.
ヒザオリニ ムスブ トトケ ヤスウゴ ザリマス
Do. Hi-za o-ri ni mu-sz-bu to to-ke ya-sz-i.
ヒザオリニ ムスブ トトケ ヤスイ

英文・ローマ字體・カタカナ體・ヤスウゴザリマスとヤスイ體(別例で言えばデキマス體とデキル體)の二つに分けてある。

わばフォーマルな表現(S體と略稱)とファミリアな表現(F體と略稱)とを並記しているわけである。(論文中「」は私註。…は省略。ゴチは注意のところを示す)

I

別に述べたプラウンの文法や音韻で大局的にとりあげたところであるが、彼プラウンの指摘していない點で會話文のすべてを通してまず眼につくことは、音韻上iとeの交替——これは結局江戸訛の血を引くものであろうが——である。例せば

- 52. (前略) o ka-n-nga-i……, オカソガイ…。(お考へ)
- 63. (Do.) (前略) ha-ya-ku ki na-sa-e……ハヤクキナサエ
- 98. (前略) ko-shi-ra-i-ma-s' ka? コシライマスカ
- 161. (前略) o shi-ma-e na-sa-re オシマエナサレ
- 261. (前略) o ka-i-ri na-sa-re-ma-shi-ta. オカイリナサレマシタ。* 別にカイルマエ=(161)のような例も見られる。
- 584. O-ma-i-so-no yo-o ni sz-tu…, オマイソノヨウニスル…

【お前：對稱の人代名詞】 *オマイはオマエ(マ、へ)とも見える。

591. (前略) ka-t-te ki na-sa-e. カツチキナサエ

1082. U-ra-nga-i sh-te. ウラガイシテ

D. VIの2. (前略) nioo-ngaiya リヤウガイヤ【兩替屋】

田圃を更け冬へ居る田手りなどいぬるな。其田圃の草種じだなる。

オマヘマ主と考えていずるは不確かなオマヘ(O-ma-i)で、
博士の「オマヘ」を「オマシ」にうつりてゐる。マシは「マシ」
に、マシ(後略) しまの體じまの草種なまらば草種は
まじりてゐる。 (オマヘは田圃主。オマヘは田圃主の體じま
マシ) マシの體

310. (前略) ji-k ke-n sa-ki ジツケンサキ..... 【十軒
先】

389. Bu-do-o no ji-k-shi-ma-sz wa..... フドウノジクシマ
スハ.....

399. (前略) yo a-ta-ri ni..... ヨアタリニ..... 【世渡りに】
402. I-ka ho-do ni i-dz-ri na-sa-re-te... イカホドニイズリ
ナサレテ..... 【...渡り...】

492. (前略) ri-o-sh-ku..... リオシク【旅宿】

553. (前略) sh-p-pa-n i-ta-shi-ma-shi-o-o. シンペンイタシ
マシヤク

右のように拗音→直音。W・Yの脱音などがみられる。いずれ
もS・F兩體にみられるところである。なお「言う」はユウユ、

ユウ；yu-t-ta ユッタツじぬの「世渡」はki-k-wa-iキカワイ
マシ(の體)にぬるが體はKa-ri-o／水車はKa-jiイセ(の)
じぬる江戸體にぬる。(タローはくちん・チン・マンは
江戸東京語の二特長として指摘してゐる。マシは
マシ・マンはマシ・マンにうつりてゐる。W (pronounced
exactly as in langlish) shows so strong a tendency to beco-
me obsolete after k and g, not only in Tokyo, but in most
parts of the country excepting the West, (中略) Even betw-
een two vowels, as in omo (w) anai, "I do not think;" ka-
ma (w) a nai, "it does not matter," many natives of Tokyo
drop it. (後略) // Y is always a consonant. Thus the syllable
mya in myaku, "the pulse," is pronounced as one syllable,
like mia ni the English word "amiable." — フランの文久
三年(一八六三)から明治二年(一八八九)までわずか二十六
年の隔りにすぎないのであるから當然ではあらうが江戸→東京
へと鮮かに受け継がれてゐるわけであらう。「西洋道中膝栗毛」
(明治三年)にも(前略)會所を「かいしよ」一杯を「うん
マ」(中略)などいふ類ひの方言は(中略)東京の下賤が癖を
穿て職作者の關目なるを...(後略)と述べてゐることなど考へる
と上述の音訛現象(よし下司下郎の言い方—江戸詞—といふ)
江戸詞から東京語へうけつがれてゐたわけであり、現代語から
考へてもF氏の記載してゐる江戸末の語が江戸→東京への過程を
いみじくも示してゐるといつてよいのである。なおゴザリマスが
音變化してゴザイマスとなつてゐる例はない。ナサリテ→ナサレ

テが更にナスツテの形となつてみられる。△サウナスツテ(nasē)
 クダサレバアリガトウゴザリマス／(前略)ゴカンベンナスツテ
 クダサレ(D・質屋での客のことば)など。以下示すところでも
 音韻變化(音訛)について多少ふれるところがあるので参照をこ
 う。

II

まず人稱代名詞について考えてみよう。

(一)自稱(かっこ内の数字は用例文の番號。○はS體、△はF體を
 示す。)

○アナタソノフデワ「WO」でヲの誤り。以下()で正しいのを
 示す。]イッポンワタクシニ(Wa-ta-k-shi-ni)クダサレマセ
 ヌカ。

△オマエソノフデ^(タ)ワイッポンワタクシニクレヌカ(51)

○アノオカダハタワムレニワタクシヲ(Wa-ta-k-shi-wo)オダ
 マシナサレマシタ。

△アレハジャウダンニ^(タ)ワシヲ(wa-shi wo)タイシタ(297)

○ワタクシハ(wa-ta-k-shi wa)キンンガヨロシウゴザリマセ
 ン

△ワタクシガキモチガワルイ(409)

○アノヒトハワタクシトモエリ(wa-ta-k-shi do-mo yo-yi)ヤ
 スクウルコトガデキマス

△アレハワシエリ(wa-shi yo-yi)ヤスクウルコトガデキル(301)

*原文は He can undersell us. と us を用ゐる。

○ワタクシドモコノヨウニシテモヨイカ

△ワタシドモ(wa-ta-shi do-mo)コノヨウニシテモヨイカ(604)

○ワタクシドモノシゴトガオソクナリマシタ

△ワシガシゴトガオソクナッタ(764)

以上でわかるように「ワタクシ」の對應を主として自稱
 代名詞は複數にドモをとつてワタクシドモ・ワタシドモ・ワシド
 モをもつ。S體がワタクシでF體がワシというのではなく(一部
 では確かにその通りであるが)S・F兩方とも一般にワタクシ(ガ
 ・ハ・モ・ノ・ヲ・ニ)が普通である。「ワタシ」の型は全體で
 三例のみ。(いうまでもなくワタクシとの對應で用いられている
 し、ハイイエワタシセイガタコフゴザリマス。/ハイエワシガセ
 イガタカイ。(746・S・F體)Vの例のように「ワタシ」の
 對應もみえる。しかしこれは用例の點から一般的とは認めがたい
 と思われる。)後述するが「アナタ」オマイ(エ)という關係と
 同様である。二三氣付いたことを記しておく、○ワタクシツ
 オカリモオシテオキマシテヨロシウゴザリマスカ(405・S體)の
 ように助詞(格助詞・副助詞など)をとらないハダカ格がみえる。
 所有を示す時は ○ハイエワタクシキヤウダイノモノデゴザリマ
 ス。△ハイエワタクシキヤウダイノモノダ。(745原文 my broth-
 ers)のように、またはガという所有格助詞を用いない形がみえ
 る。もつとも△ワタクシノカサトミノ。(46・S・F體)のよう
 に、ノを用いており上掲(764)のように△ワタクシドモノシゴ
 ト/ワシガシゴトVハワタクシノハナフキ/ワシガハナフキ(731)
 Vのようにノ・ガのつかいわけがみえないこともない。(ガは主

としてF體) ○ワタクシムマガイッピキカタライタメマシタカラ
……/△ワシガムマガイッピキカタライタメタカラ…… (759) の

ようにワタクシでは助詞がなくワシではガがみえる。一般にガよりノ(または全たく用いない。)がフォーマルであり丁寧な方がいい方になると考えられるのかも知れない。△ワタクシガキモノヲヨロシクヌヒナオシテクレロ(735)√の例から推してもうなづけそうである。問題は助詞ガの用法にあると思われるから……。チ

ェンバレンの<The most usual equivalent for "I" is *watashi*, lit. "selfness." The vulgar often contract it to *watashi* and *washi*>にはほぼ同じである。話し相手が自分より上の

時はワタクシとあつてワタシ・ワシなどは用いないようである。

上にも例がみえるが△ダンナハタクシノイタスシゴトガゴザリマスカ(189)√もよい例といえよう。(對話のところでも買い手と賣

り手で△オマイーワタクシ√の關係をみることもできる√△アレガミセハオレノ(O-re no) トナリダ(355・F體)

右例のようにオレがみえる。この三五五はS體だと△アノヒトノミセハワタクシノトナリデゴザリマス√とあつて表現のちがいがよくわかる。後述するがアレガアノヒトノ…ワタクシノ…オレノという關係である。ほかに

△オレガ(O-re ga) ハナシタコトヲナイショウニシテオケヒト

ニハナスナ(695・F體・S體では△ワタクシガ……√)

△(前略) オレガオマエニヤッタカネハイマドコニアルカ(1194・F體・S體では△ワタクシガアナタエアゲマシタカネ……√)

右でもオマエニアナタエ…オレガワタクシガという關係を

見い出すことができる。「オレ」の用例は以上三所のみ。洒落本や人情本・滑稽本にもみられるところである(初期浮世草子あたりにもオレはよくみられる)。またれいの「夢醉獨言」にも夢醉が自稱にオレを用いている。わりあい一般的だつたと思われるがこのブラウンでは遂に三例しかみえない。チェンバレンのいう△Ore is a very vulgar corruption of ware, (寢言)√がやはりはば妥當な縁なのであろう。自稱は以上。

(一) 対稱: アナタ・オマイ(エ) が用いられ兩者ともごく一般的と考えられる。(自稱の部の用例をみよ)次に用例を示しておこう。

○アナタ(A-nata) シタクハヨロシウゴザリマスカ

△オマイ(O-mai) シタクハイイカ(10)

○ワタクシハデキマスホドアナタニ(a-nata ni) オテツダイヲイタシマシヨウ

△ワシハデキルホドオマイニ(O-mai ni) テツダラウ(387)

○ワタクシハアナタヲ(a-nata wo) モウスクウコトガデキマセ

△ワシハオマイヲ(O-mai wo) モウスクウコトガデキヌ(563)

オマイ・オマ・オマエ・オマエなどあるがオマへ以下は O-mae で文字の上のちがいでだけである。上述のようにアナタに對

することはである。ごく一般的と考えられる。アナタは目上に、(S體) オマイ(エ) は同輩・目下(F體) に用いられている。

そして湯澤博士の△「おまえ」は現代と違つて、必ずしも目下にのみ用いると定まつていない。次の例のごとく目上のものを指すにも用いる√と違つてオマイ(エ)は目上には用いられていない。

また音韻で述べたようにオマエよりオマイの形の方が多い。こゝでも湯澤博士の「おまえ(なん)」を「おまゝ(おこ)」と云うことがあつたといふのと異なつてゐる。チェン・レンの「The following equivalents for "you" are all in common use: —Anata, a contraction of ano kata, (中略) Anata is a polite expression (中略) Omae, lit. "honourably in front," was formerly polite, but is now only used in addressing inferiors, such as coolies, one's own servants, one's own children, etc.)」が實相説明に近いものである。フ氏は江戸詞より東京語の方に近く(チ氏の説明に近く)なつてゐるといふ。對稱は以上の二語がごく一般的であるが、ほかにテマエ(テマイ)がみえる。

△ワシハライゲツテマイノ (te-ma-i-no) キウキンヨマシノヤロウ (531・F 體ではアナタノキウブン……)

△テマエ (Te-mae) ナニガホシイカ (1127・F 體ではアナタニガホシウゴザリマスカ)

△ダレガテマイヲ (te-ma-i-wo) ココヘツカハシタカ (1217・F 體ではドナタガアナタヲ……)

△テマエハシヤベリスギル (1242・F 體ではアナタハ……)

右のようにアナタに對應する語。これも東京語に類してゐる。次の用例はオマエとテマエの關係がわかる。△Are you married? (12) √ という英文に對する日本文として△○ゴシンジハゴザリマスカ(目上に原註) △オマエカミサンハアリマスカ(同輩に同上) △テマエハニヤウボウガアルカ(目下に同上) √ とある。テマエはオマエよりさらに下に位すると考えられるわけである。チェン

・レンが「The word temae, lit. "before the hand," is remarkable; for it may be used either as a very humble and therefore polite equivalent for "I," or as an insulting equivalent for "you."」と述べてゐる通りである。フ氏には自稱の用法は見えない。

(三) 他稱

○アノオカタニ (A-no-o ka-ta ni) オキキナサン (後略)

△アノヒトニ (A-no hi-to ni) キン (後略: 22)

○アノオカタハヨムコトガデキマスカ

△アノヒトハヨムコトガデキルカ (50)

右の通り「アノオカタ」「アノヒト」の對應がみえる。英文では He・Him を用いてゐるところである。これに類するものを更にあげると

○アノオヒトワ (A-noo hi-to wa) ソレニナレテオシマイトサ

レマシタ

△アレハ (A-re-wa) ソレニナレテシマッタ (299)

○アノヒトハワタクシトモヨリヤスクウルコトガデキマス

△アレハワシヨリヤスクウルコトガデキル。 (301)

○アノオカタハドチラデシヨクジライタシマスカ

△アレハドコデメシラクウカ (1189)

○(前略) アノオカタガタノ (A-no o ka-ta nga-ta no) オボ

シメシハソウイイタシマス

△アノヒトタチノ (A-no hi-to ta-chi no) オモフトコロハチガウ (275)

○アノオカダハドコエオイデナサレマシタカ

△アノヒトハドコエマイリマシタカ (1187)

○コノホンハドチラデカイハンニナリマシタカ

△コノホンハドコデハンニナツタカ (1188)

少数の例であるが「ドコ」にS・F體の相違はなさそうである。

ただS體「ドチラ」はF體では用いられていない。したがって「ドチラ」ドコの對應が考えられないこともない。小説類にみえる「どこ・どこら」などはみられない。なお○アヘンハイツヨリ (i-ta-ka-yo-i) ワタリマスカ (S體) △アヘンハドコカラワタルカ (F體・1192) に「イツク」がみえるが話しコトバとしてはいかがかと思われる。ついでにドチラ (which)・方向・場所をあらわす語—コソアド系—とについてふれておく。

○(前略) ドチラガ (do-chi-ra nga) トフクヘユキマスカ (705)

△(前略) ドチガ (do-chi nga) トフクヘユキマスカ

○ドチラガオキニイリマスカ

△ドチラガキニイルカ (1200)

○ドチラノツミガオモウゴザリマスカ

△ドチノツミガオモヒカ (1204)

ここでも「ドチラ」ドチ」の對應がみえる。ドチは促音ではない。チエンバレンもこの二語を擧げている。(湯澤博士はこのドチを示していない)

次にいわゆるコソアド系についてまとめるのべておく。(ドは既述)

○コレデタクサンゴザリマスカ △コレデタクサンカ (605)

○コレハウタガイハゴザリマセヌ △コレハウタガイハナイ (978)

○コニコザリマス／△コニコニアル (351のS・F體)

○ソレハドナタデモデキマス

△ソレハダレデモデキル (5)

○コレトソレトハチガイマス △コレトソレトハチガウ (1000)

○アレハオホキニマチガイデゴザリマシタ

△アレハオホキニマチガイデアツタ (913)

* なお他稱の人代名詞としてアレがあるが上述した。

右のは「コノ・ソノ・アノ」などの用法は現在と同じなのであらためて説かない。

○アチラハ (A-chi-ra wa) ドウデモヨイガコチラハ (Ko-chi-ra wa) ゼヒモトメオキタイ

△アチハ (A-chi wa) ドウデモヨイガコチハ (Ko-chi wa) ゼヒモトメオキタイ (728のS・F體)

○アソコエ (A-so-ko e) オイデナサルナ (後略)

△アソコエ (A-s-ko e) ユクナ (後略) 124のS・F體

右のように「アチラ」アチ」「コチラ」コチ」の對應がS體とF體でみられる。(不定稱と同様) 「アソコ」アスコ」の對應がみられるようであるが全體を検するとアスコが壓倒的に多く△アスコニオイデナサレテハアンドイタシマセヌ／アスコニイテハアンドセヌ (682) V のようにS體でもアスコを用いている。湯澤博士が△場所の遠稱には「あそこ」を用いる。(中略) けれども

時が経つに従つて「あすこ」を用いることが多くなるようであり……Vと述べているのはその真に近いわけであろうか。チエンバ

レンにアソコが見えずアスコ (askko, there: *asuko kura, the-nee; asuko ye, thither*) が記載されているのはブ氏の記録した日本語がまさしく江戸末〜明治初年へかけての日本語の實態をとらえているといつてもよからう。

III

次に問題になる打消・推量・存在・指定などのいい方について述べておく。

・打消の表現

- ハヅカシウハゴザリマセ又カ △ハジラシラ又カ (18)
- アナタソノフデワイツボンワタクシニグダサレマセ又カ
- △オマエソノフデワイツボンワタクシニクレ又カ (51)
- (前略)ドウグガミエマセ又 △(前略)ドウグガミエ又 (185)
- △アノヒトキヤウハイチニチウチニオリマセナンダ (260のF體)
- S體はオルスデゴザリマシタ)
- アノオカタハマダオトナニオナリナサレマセン (ma-se-n)
- △アレハマタオトナニナラ又 (nu: 344)
- アノオカタハムマデハシラセマシタガジシンドトメルコトガデキマセナンダ (na-n-da)
- △アレハムマデハシラセタガトメルコトガデキナカツタ (na-ka-ta: 360)
- ワタクシハイイママデニホカノハゴザリマセナンダ
- △ワタクシハイイママデニホカノハナカツタ (na-ka-ta: 416)
- ワタクシマダハイケンイタシマセナンダ

- △ワシハマダミナカツタ (455)
- ワタクシハコレヲイタシテモイタシマセ又デモ……
- △ワシハコレヲシテモシナクテモ…… (524)
- アナタハヤクオカイシナサラネバ (na-sa-ra-ne-ba) ……
- △オマイハヤクヘンサイセネバ (se-ne-ba: 585)
- (前略)……ヤメズニナサレ、△(前略)……ヤメズニシロ (588)
- アナタニオワカレマウシテヨリヒサシクオメニカカリマセナンダ
- △オマイニウカレテヨリヒサシクアハナンダ (621)
- ニツボンデハタマノカザリヲツケマセ又
- △ニツボンデハタマノカザリヲツケナイ (689)
- (前略)トジガクヅレテミエナクナリマス
- △(前略)トジガクヅレテミエナイ (693)
- (前略)ワタクシハシンジマセ又
- △(前略)ワタクシハシンジナイ (703)
- (前略)ユダンハナラズ。△(前略)ユダンナラ又 (1028)
- ナゼニハヤクオイデナサレマセナンダカ
- △ナゼハヤクコナカツタカ (1233)
- (前略)ハコノウチヲナマリデハリマセネバナガイカイジャウハモチマセン (D.3の6)
- (前略)カギリワゴザリマスマイ
- △(前略)カギリハナカロウ (596)
- ヒサシクハツヅキマスマイ
- △ナガクハツヅクマイ (624)

○アノオカタノヤマヒハナオラレマスマイ

△アノヒトノヤマヒハナオルマイ (650)

イイエデキマスマイ (D.lv の56)

打消はヌとナイが擔當している。推量の意(英語で shall not, will not)が加わるとマイである。ふつうナイは東國語といふは上方語といわれている。事實江戸時代を檢してみるとそのことは肯づける。しかしヌの使用が東西ともに壓倒的である。湯澤博士は江戸言葉ではこの二語(ナイ・ヌ)が初めから並び行なわれたことは事實である。しかもこの二語を區別して用いようとする意識がなかつたものらしい。従つて同一人が同時に兩種の語を用いているVと述べている。ブ氏の場合壓倒的にヌが多いことからしても同價で二語が並びおこなわれてはいないのであり、やはりどこかに違いがある。「マセヌ・ナイ」の對應が考えられ、いわゆる關東語的のナイはS體にはみえないということである。80%のようにS體のナサレはシロと對應し、後者のいい方は東國的で、結局F體になつてゐるわけである。丁寧なもの言い(ととのつたはずかしくない表現)や標準的でない方にはいわゆる上方語的(長い間つづいた血筋正しい語)なものの優位が考えられるのではなからうか。すくなくともこのような上方語的優位さから東國語(江戸詞)的優位さへの轉換(これは地域的な關係ではない)が江戸詞から東京語への一過程ともいふと思う。この點打消に限つて明治初年(半ば頃まで)まで上方語の色彩が投影されていふといえよう。用例をみると「マセナンダ・ナカツタ」の「對應」も知られる。前者が上方語系統であることはいふまでもないしマ

セナンダと丁寧な言い方に接しているのもよく肯づけるのである。(416・596に二つだけ形容詞の例もあげておいた。)チエンバレンが「第一活用〔例せば置ク〕の否定態」で第一型・第二型に分けてそれぞれナンダとナカツタとを對應させ(共に確定過去(Certain Past)と名づけている)しているが第二活用・第三活用および不規則動詞では第一型に確定過去がなく、したがつてついにナンダは姿をひそめている。ナカツタの地歩が確立しているのである。そしてマシタに接する時はマセンデシタを示めすようになつてゐるのである。もちろん簡単にマセンデシタにおちついたわけではない。F. Eward の「日本語課程」(Cours de Langue Japonaise, 第五卷)にはマセンデシタの形は見えない。デスがまだ一般的でなかつたのだから當然であらう。だからマセンデシタは大凡そ明治二十一年頃に一般語法とみとめられるようである。アストンのもの(第四版・明治二十二年)にもハタベマシタVの否定形として、ハタベマセナンダ/タベマセンデツタVの兩形を示している。語史的には——ダツタの形の方が早くでているので——デシタになるまでは時がかつたようである。湯澤博士のいわれるようにナンダ・ナカツタが江戸末期でも五分々々に行われたとはいへ、實はナンダが上述のようにほとんど丁寧なものいい(610の例文を参照)に用いられていたことは注意してよからう。人情本でナンダ・ナカツタが混用されており前者が壓倒的に多いとはいへ、ブ氏の場合と同様にマスに接してマセナンダ・マシナンダとなつてゐる點は既にナンダの用法の限定を示していることにならう。ブ氏でF體にナンダがないところは夢醉

獨言(天保十四年)などの例と共通するところであり西洋道中膝栗毛(明治三年)・安愚樂鍋(明治四年)なども共通するところであつて江戸末にはF體においては既にナカツタが一般的となりS體ではマシナンド(マセナンド)が一般的となつてゐたと結論してよさうである。そしてナンダが影をひそめる明治二十年代前後こそ東京語の確定期と考えても——この打消の過去表現に關する限り——よいのではあるまいか。中村通夫先生がナカツタについてハ三馬のように、江戸語を「江戸でうまれたお歴々のつかふ」(狂言田舎操)本江戸と「下司下郎」(同上)の用いる「ぐつと鄙しい」(同上)江戸なまりに分類すると、ナカツタは江戸なまりには行われず、本江戸に多く行われたと見られよう。(中略)とまれ、ナカツタを助動詞として使用することは右の文献(人情本・滑稽本・夢酔獨言をさす)に現われたところからすれば、上層部にその發生を持つと見られる。Vと結論づけられているのは疑問がある。むしろ逆に「江戸なまり」でないところにかかれていたのはナカツタでなくて(マセ)ナンダであつたのではなからうか。マヤナンダに對するナイやナカツタの蠶食の過程こそ(接續面を考慮してみても)江戸語から東京語への過程の一面といふのではないかと思う。ホフマンもその著「日本文典」(A Japanese Grammar, 1868)・動詞論の中の否定過去形「(Forms of the negative preterite)で△否定接辭ヌはナンダになる。アケヌーアケナンダ。ミヌーミナンダ。ユカヌーユカナンダ(數例省略)……江戸の話しコトバではアケナナカツタ。ミナナカツタ。ユカナナカツタを用いる(後略)Vと述べており「否定動詞の繼

續形」では△江戸方言(The dialect of Yédo)ではナイを用いる。否定助動詞としてアケヌ。ミヌ。ユカヌ。の代りにアケナナイ。ミナナイ。ユカナナイを用いる。したがつてユカズニに代つてユカナイデを用いる。(後略)Vと述べている。更にごく簡単な記事であるが△江戸の俗語(the vulgar language of Yédo)ではマセヌに對してマシナンド「マセナンドが正格。人情本・滑稽本にはマセナンダ。マシナンダの兩形がみられる。ブ氏は例文のように正當である。」を用いるVとみえる。マスにつく時はまさしくナンダの形が江戸でも出てきているのである。(これはブ氏、ホ氏・末期小説類に共通した現象である。)以上でナイ・ナンダ・ナカツタをめぐる江戸末から明治初年にかけての事情とその推定は終る。マイは例文のように特にめだつた點はみえないようである。△マスマイとマイVの對應がみられるぐらいである。(江戸訛のメエはみあたらない。)ただここでこの「ゴザリマスマイ」ナカロウの對應を考へておきたい。松村明先生は△可能動詞といわれるものも「あるける／通られるの類」東京語になつて急に多く用いられるようになったといふことがいえるのである。(中略)これとは反對に江戸語の當時はひろく行われていたのが東京語においてしだいに話しことばから姿を消していつたような語もある。そのいちじるしい例は助動詞の「まい」である。(中略)今日話しコトバでは一應「まい」をあまり用いずに、そのかわりとして「ないだらう(ないでしょう)」「……ないでしょう」などというような言い方をするというような習慣をもつに至つては、こゝういうような習慣ができたのはそう古い

ことではないもののようである。V と述べている。私も日頃マイのもつ表現価値について——ことに江戸へ東京への過程において——どこまで「マイ」ナイダロウ・ナカロウ」の對應がみられるか調べていたところであつた。Z氏の例はまさしく東京語の萌芽をみる事ができると思う。ほかに△スコシナイダハヨロシウゴザリマシヨウガナガクハヨロシウゴザリマスマイ。△スコシナイダハヨカロウガナガクハヨクナカロウ(671) V の例もみえてこの證據となるものである。もつとも△アノコトハツイニゴザリマスマイ。△アノコトハケツシテアルマイ(916) V のように同じくマイを用いている例は多く、上例のような現代語的傾向は多くを見ることができない。ただ表現の二様式を觀取することができるのはたとえ用例が少く、その上形容詞につくナカロウの形ではあつても表現価値はほとんど近似値をもつものと考えてよくやはり萌芽と規定してもよいのではないかと思う。なお打消表現に關して形容詞のナイ(アルの對)飲ムナの助詞ナの種類もみえ(ナは連用形よりつく)るが割愛した。次に可能のいい方について述べる。

- ジャガタライモハコデカワレマスカ(Ka-wa-re-ma-s. ka?)
- △ジャガタライモハコデカワレルカ(Ka-wa-re-ru ka?)
- ワタクシハハナサレマセヌ。△ワシハハナサレヌ。(I cannot tell. 440 the S・F體)
- ワタクシハミワケラレマセヌ(mi wa-ke-ra-re-ma-se-nu)
- △ワシハミワケラレヌ(481 the S・F體)
- ワタクシハツノヨウニナガクオキテハイレマセン

- △ワシハソソナニナガクオキテイラレヌ(515)
- ワタクシハコノウエハナニヤイタサレマシヤフカ
- △ワシハコノウエハナニガシラレヤフカ(What more can I do? 1157)

可能は用例のようにレル(レ)・ラレル(ラレ)で特に問題點はない。動詞への接續の仕方でも口語文法と同じである。サ變ではシからの例があるが江戸ではセ・シいずれからもついているのでやはり問題になるまい。(可能の意をあらわす動詞「される」はみえない。また可能動詞「飲める」もみえない。ここで可能助動詞を用いるかわりに、動詞デキルを用いるのが多いことである。

- アノオカタハヨムコトガデキマスカ
 - △アノヒトハヨムコトガデキルカ(50)
 - (前略)オボエルコトハデキマスマイ
 - △(前略)オボエルコトハデキマイ(234)
 - (前略)トドクコトガデキマセン
 - △(前略)オヨブコトガデキヌ(510)
 - ワラデカミヲツクルコトガデキマスル
 - △ワラデカミヲツクルコトガデキル(765)
 - (前略)オナガイキハデキマスマイ
 - △(前略)ナガクハイキラレマイ(236)
- 右のようにデキル(……コトガ(ハ))とかあるいは名詞句(節)など體言に準ずる言い方を受ける)で表現する。最後の例のようにデキル・ラレの對應もあることはあるがそれによつてS體がデキルという動詞表現を用い、F體がレル(ラレル)という助動詞

表現を用いるとは断定しにくい。ことに日本語的表現では病人に向つてイキラレルかどうかと話すことは露骨すぎると思う。(別の表現をとるであらう。)チェンバレンはこのデキルについて
 <Potentiality is often otherwise expressed by means of the verb *dekiru*, a corruption of the classical (i) *de-kuru*, "to come out." *Dekiru* has come to mean "to exentate," "to take place," "to be ready," "to be done," "to be possible," but must often be rendered in English by the active "can," "can do," "do," (後略)>と述べている。また馬場辰猪の「日本文典初歩」(1873)「ルで終る第二活用—ミル、見る」の可能法 (Potential mood) のこゝに \wedge *Watakushi wa miru koto ga dekinashita* (Past Tense) *Watakushi wa miru koto ga dekinasho* (Future Tense) \wedge とミルコトガデキマスを示している。プ氏における可能表現はそれ故、江戸語法をまだのこしているというのではなくて、東京語へ志向していると言つてよからう。(もつとも馬場も行クという動詞の場合は行ケマスのように可能動詞を示している。いわゆる可能動詞が一般的となるまでその缺けているところを機能的に補つていたのはとりまなおさずこのデキルという表現ではなかつたかと思う。)

- 推量「意志・詠え・問いたしなどの表現もよくめる。」の表現
 ○ (前略) ワタクシカイマシヤウ (Ka-i ma shi-o-o)
 △ (前略) カヲフ (Ka-wo-o) (25)
 ○ アナタナンゾオスケモウシマシオカ

- △ オマエナンゾテツダヲウカ (53)
 ○ (前略) プンサンライタシマシヤウ
 △ (前略) ケンサンヲスルデアロウ (de a-ro-o・278)
 ○ (前略) サシズライタシマンニウ
 △ サシズランニウ (shi-yo-o: 452)
 ○ (前略) ヒトガナニトカオモイマシヨウ
 △ (前略) ヒトガナニトカオモウダロウ (584)
 ○ オホカタサヤウデゴザリマシヨウ (後略)
 △ オホカタソウダロウ (後略: 648)
 ○ イマハキツトデキテオリマシニウ
 △ イマハキツトデキテイルダロウ (670)
 ・ ヨツカメニハキツトモツテマイリマセウ (mairimash'oo)
 ・ オタノミナラツクツアゲマシヤウ (D・8)
 用例のようにハカイマシヤウ \wedge カヲフ(ヤウ(よう)) \wedge フ(う) \vee という意志表現とハイタシマシヤフ \wedge スルデアロウ(ヨウ \wedge ウ) \cdot ダロウという單純な推量表現。ハモウシマシオカ \wedge ……ヲウカ(シオカ(しようか)) \wedge ヲウカ(うか) \vee の詠え・問いたし表現。——などのほば三つに分けて考えられる。(假名づかいはい用例のようにシヤウ「シヨウと發音」・シヨウ・シオセウ「これは上の三例とちがいシヨウの發音であらう」…フ・ウなど多様である) 右のはか△アノオカタハソレヲナサレテハミチガチガイマシヤウ。△アレハソレヲシテハミチガチガフ (304) \vee のように迂言的表現も考えられる。ヨウとウの相違を考えると「マス+ヨウ」 \downarrow 「マシヨウ」の形がまず考えられる。これは意志でも推量

でも同形である。S 體ではマスに接する關係上すべてがマシヨウとなつてあらわれているが、F 體では最初の例文のように意志（これに準じるもの）では「ウ」を接し單に推量の時はデアロウ・ダロウのように別の形をとり意志と推量で分化している。接する動詞の活用形によらず F 體では「ヨウ」が接して意志をあらわすことはないようである。もつともこの分化は江戸語で行われ東京語へ受つがれているのであるが、ブ氏においてウは片方にのみ用いられていることは注意しておいてよからう。¹⁰

推量の表現は廣い意味で判断（判定）の表現であるからここで指定・斷定・存在過去などについて考えておきたい。上例でもわかるが

○アノオカタハウマレツキオシテゴザリマス。

△アレハウマレツキオシダ（265）

右のように△デゴザリマスと△Vの對應が一般にみられる。その他の

○（前略）ハナハダヨロシウゴザリマス

△（前略）ハナハダヨロシウゴザル

○カケウリハタカウゴザリマス

△カケウリハタカイ（823）

○ソレハイチバンヨロシイノデゴザリマス

△ソレハイチバンヨイノダ（929）

○（前略）オリアシクルステゴザリマシタ

△（前略）アイニクルステアツタ（1175）

○コレハワタシガセンジツアナタニオハナシマウシタデゴザリマス

△コレハワシガコノアイダオマエニハナシタノダ（1055）
○コレハイツマデオイリヨフデゴザリマスカ
△コレハイツマデイリヨウダカ（370）

○ワタシノハタケニケイトウガハエマスル

△ワシハタケニケイトウガハエル（548）

○（前略）メウニチオザシキヘサシダシマスル

△（前略）アシタオザシキヘサシダシマス（702）

○カラノカイガンニオウクカイゾクゴザリマス

△カラノカイヘンニハタイソウカイゾクガアル（767）

は純粹に助動詞とはいえないが、……ガアル「存在をあらわすもの」が多く見えるのであげておいた。

○ゴクジャウノマイバシデアリマスカ（D.lv 外國人）

△ケツチャクノトコロハシヒヤクゴジウドラデアリマス（D.lv の商

人のことば）

右例のように△ゴザリマスと△Vがあり形容詞に△のつく時は△デゴザリマスと△Vと△をとりつて△につく。九二九のように△ヨロシイノデゴザリマス△のいい方は少くむしろ△ヨロシウゴザリマス△のようにウ音便形になるのがふつうである。ほかに△マスル（マス）と△V△マスルとマス△Vの對應がみえる。

また過去では△デゴザリマシタとデアツタ△Vの對應が考えられる（「on the way」のように△をとりつて△デゴザリマスの例も注意される）。疑問の場合△デゴザリマス△と△Vの形がある。F 體の△カはいささかおかしいが△ダレガユクバンダカ（1214）アレハダレダカ（1220）ダレノホンダカ（1227）ダレノダカ（1229）△Vのように多

くみえる。デスがなかつたのでハ……デスカVの形もなく、ハ……
 ……デカVが用いられたのであろう。過去の表現はハタ・オザリマ
 シタ・マシタ・アツタVなどがみられ特に異なる點はなさそうであ
 る。ただ江戸語—東京語を考える場合にハマスル（マスルナラ
 バもある。）とマスVの對應とハ……デアリマスVとの二つの表現
 が問題にできる。マスルがS體、マスがF體の表現であることは
 ハ○（前略）アナタヲダマシマスル。△（前略）オマヘヲダマスV
 （130）のアナタとオマへの對應でも知られよう。湯澤博士は特に
 兩者のちがいについて述べていない。アストンはマスについてハ
 Mast ov Masuru is never used as a distinct word. (廿五)
 The form masuru is more elegant, but less commonly used
 than mast>と。同書の第四版ではハMasrn is more for-
 mal, and less common than mast>と述ベブ氏の實例に關し
 ての適當な説明を與えている。elegant という評語はブ氏と一致
 しているし、江戸末から明治初年にかけてマスルが行われており
 次第に消滅していったことが充分うなづけるのである。（馬場辰
 猪チェンバレンにはマスルがない（ブ氏のがまさに江戸と東京
 への過程を示す恰好なものであることを證するのであろう。そ
 れは打消にハマセヌ（シ）マセナンドVの形があるようなもので
 ある。ハデアリマスVについてはわづか二例にすぎないのでくわ
 しいことは論じられないが（ハビビビノクダガアリマスナラ……。
 V（D.1）のようにガアリマスの表現もみえる。）、中村通夫先生の
 「であります言葉」にくわしい御研究があるのでそれをみていた
 だくこととし、ブ氏においては商賣上の取り引きで客と店主の間

で用いられている。そして(1)江戸言葉のデアリマスのように遊里
 のにおいはなさそうである。(2)長州方言のデアリマスでもなさそ
 うである。(3)田舎侍でもなさそうである。發生はともかくとして
 「ガラタマの英蘭會話譯語（明治元年）」にみえるハアノヒトノ
 ツミニハカツフヒト、サトウデアリマスVやアストンのハサヅ
 タイクツデアリマシタロVなどと共通するものであろう。馬場辰
 猪がデアリマスを認めているのもデアリマスの使用が一般的にな
 るうとしていたことを語るものであろう。ただブ氏で用例のすく
 ないことはやはり特殊な面をもつていたと考えねばならぬある
 は（洋學者・翻譯など考えると）is, are などを丁寧體にする
 という翻譯にあたつてそれまでのデアルとマスとを結合してデアリ
 マスを作つたといふところがあるのかも知れない。

IV

なお紙數の關係もあるので以下氣のついたところをいくらか述
 べておく。

(a) 命令のいい方。

- マバタキノマニナサレマシ △マバタキノマニシロ（20）
- アナタオシマイナサレタクバヤメズニナサレ
- △オマイシマイタクバヤメズニシロ（587）
- コノハコノナカノモノヲアケテクダサレ
- △コノハコノナカノモノヲアケロ（137）
- ハヤクオラキナサレマセ
- △ハヤクヲキナサレ（163）

○コエヲアゲテオヨミナサレ

△コエヲアゲテヨメ (806)

右例のように△(オ)……ナサレマセ↓ナサレマシ↓ナサイマシ
 (○)スナヲニナサイマシ。△オトナシクシロ(32)↓ナサレ↓ナ
 サエ(一を見よ)↓シロ/クダサレマシ↓クダサレ↓クレロVが
 ありF體はロ!をつけるのがごく一般的である。(ナサレよりナ
 サエの方が低次であることは満澤博士にもみえる)また△(○)(前
 略)オカイナサレテキタクダサレ△(前略)カッテキナサエ(591)
 Vの對應もみられる。オ……ナサレ(イ・ル)の表現は非常に多
 い。更に敬意が加わると△アカリヲオツケアソバサレマシ△
 アカリヲツケロ(715)Vとなる。上掲のように△ナサレ(シ)ロ
 (または●)Vの對應があるが次のようにナサレの省略形らしいナ
 がみえる。△アノヒトハコレヲシルカシラヌカオオキナサレ△
 △アノヒトハシルカシラヌカキナ(五・七・九)(794)Vこれは
 満澤博士のにはハ……ななVの形でしか示していない。「浮世風
 呂」にもハ……衣を脱なVハマテ黙止なよVの例があるがかなり
 俗っぽい感じをうける。チャンブレンも Imperative としてロ・
 ヌをあけているが、(じふわりと)△A familiar imperative, of
 ten used by members of the same household in addressing
 each other, is obtained by adding na to the indefinite form,
 as yobi-na! "call" shi-na! "do!" (後略)△とナについて述べる
 なる間投詞であつてナサイの短縮ではなからうと推定している。
 アストン(四版)は△窓ヲシメテクレVより△窓ヲシメナVの方
 がよりよい言い方でナをナサレの省略のように考えている。

(b) 希望表現

○アナタハトウモロコシヲオスキデゴザリマスカ

△オマエハトウモロコシヲスキカ (92)

右例ともに△Do you like Indian corn? の日本文である。
 △……ヲスキVという構文はちよつとひつかかるようである。こ
 れは△○イツバイライレナサレ。△イツバイイレロ(149)。(○)(前
 略)コノハラヌキタイ……。△(△も同じ)。424)スルガノチヤヲ
 ニセンギンダライカイタイ(後略・D.I, 17) ○コノイエハシエフク
 イタシトウゴザリマス △コノウチヲシユフクシタイ(1032) △
 メウニチノウチニカネヲサイカクイタシタイ(D.II) 以上(……ヲ
 イレナサイもヲの用法として出した)は同類のものである。語
 史的なものは松村明先生のものにゆずるがチャンブレンもハソノ
 モノヲミタイ|| "I want to see that. V をごくふつうにあげてい
 るし、ガラタマの「英蘭會話譯語」でも△(前略)ボウシヲカイタイ
 モノダVのようにあるところを見ると△……ヲ……タイVはあるい
 はごくあたりまえであつたのであろう。ただ△ソノウリモノノ
 カナキンライクラゴザリマシテモカヒマシヤウ(後略・889)Vは
 英文△……the shirts he has for sale Vのhasの目的格語
 をカナキンとしているところからの翻譯語と考えられるので、動
 詞の機能がことなるとはいえ、△……ヲ……タイVにもあるいは翻
 譯調があるかも知れない。古い純日本語々法といわれてはいるが。
 例文のように外人のものには多少警戒を要しよう。△(前略)ベン
 トウバコノタガイガミタイ(D.VII) △ミホンガミタイ(D.I) △(前略)
 ネダンツケガキキタイ(同上)などと△ガ……タイVの形でもみ

えるのである。動詞ホシイの場合は△(前略)オシメリガホシウゴザリスマス△(前略)アメガホシイ(528) △ワタクシハコレヲホシウゴザリマス △ワシハコレガホシイ(435) △ワタクシカネガサンブホツシイ(How's that?) 504 V △アナタナニガホシウゴザリマス △テマエナニガホシイカ(1127) V のように△:ガホシイVをもつ。タイでもタイの受ける本動詞の性質如何によつてヲやガをとる點もあろうかと思う。

最後にS・F體の對應語を示して私見を加えておくことにする。
(A)語・文・句について(S—Fの順による。)

アガル—タベル アゲル—ヤル イエタ—ナオツタ ……イタシテモ…シテモ エランデ…ヨリドリニ…ウシナウ—ナクス
オナクナリナサレマシタ—シナレタ・シキヨ オツシヤリマシタ
「イツタ オキカセテクダサラバアリガトウゾンジマス—キカセルナラアリガタイ オボシメス—オモフ オメニカカル—アウ
オオセラレマシタカ—イツタカ オツシヤリマシタカ—ハナシタカ・イツタカ オイソギ—セク オイデナサレル—オラレマス—イ
ル カツセンニオヨビマシタ—タタカツタ カタメアソバサレマシ—カタメロ キウソクナサレマシ—ヤスメ クダケマシタ—コ
ハレタク クウフクニナリマシタ—ハラガスイタ クチガオオスギ
マス—シヤベリスギル ゴシツタイニナリマシタカ—デキアガツ
タカ ゴジンジ—シツテイル ゴランナサレ—ミナサイ ザンネ
ンデゴザリマス—クチオシイ サクヤライガイタシマシタ—ユス
ベカミナリガナツタ シツネンイタシマシタ—ワスレタ シヨク

ジライタシマス—メシヲタク セツブクヲイタサレマシタ—ハラ
ヲキツタ ソダテル—クハセル ゾンジマス—オモウ ゾンジマ
セヌ—シラス タヤスイ—ヤサシイ タベアキマシタ—クイアキ
タ タタクーブツ タイケイニゾンジマス—ハナハダヨロコブ
チンチヤウイタサレマス—ダイジニスル チヤクシタ—ツイタ
デゴザイマスカラ—ダカラ デキシマシタ—スイシシタ ナサ
ル—スル ハイケンイタシマシタ—ミタ ヒギヤウスル—トブ
マイリマシタ—イツタ・キタ ミエマセヌ—メツカラヌモチイ
ラレマス—ツカヘルカ モウシマス—イフ

(B)名詞・副詞について

アラハニ—アキラカニ アチラ—アチ イゼン—マイ(エ)
イチネンアマリ—イチネンヨ イカガードウ イクタビモ—イク
ドモ イタツチ—イチバン オキヤクサマ オオ(ヲ)キニ—タ
ント(オオキニ(F)はハナハダ(S)に對應)オリオリ—トキ
ドキ オシメリ—アメ キウブン—キウキン ケンソン—ヘリク
ダル ゲジキ—ヤスイ コノヤウナ—コンナ ゴカツテノラー
ス キナヲ コンザツ—イリコンデ コンニチ—ケフ ゴハン—メシ
ゴゼン—オメシ ゴジソク—ムスコ サキホド—サツキ サヨ
ウニ—ソウ シヤクヨウ—カリ シンタク—アタラシキウチ シ
ンルイ—ミヨリ シダイニ—ダンダン センジツヨリ—コノアイ
ダヨリ ソノヨウニ—ソノナニ ソノコトデ—アノコトデ タジ
ツマタ—マタコンダ(コンダは今度の訛) タクサン—オホク・
タント タクサンハ—コンナニ タイソウニ—タイソウ タビタ
ビ—ドド チツト—スコシ ツイエ—ザツピ ツイニハ—シマイ

ニドノヨウデードンナ ナニエーナゼ ナニホドーイクラデ
 ナイガシローアルガナシ ニツチウーマヒル ニハカニーキウニ
 ノウジヨーモンジヲヨクカク (a good hand) ハクシキノヒト
 |モノヲシルヒト ハヤーモ ハナハダーオホキニ・メツソウ
 ヒンキウービンボウ ヒサシクーナガク ブゲンーテウジヤ ヘ
 イゼイーツネニ マコトニータシカニ ヤハリーヤツバリ ヤタ
 ラニーヤミコモ ヨワタリー渡世 ヨウヤクーヨウヨウ エドヨ
 リーエドカラ リブンーモウケ

(A)は動詞及び文の一部をS・Fの對應で示したのであり(B)は副詞・名詞を主に示した。S體については既述したが、敬意表現が多くみられる。それも直接敬意を示すものと行爲・言動に對する敬意のうけとり方(あらわし方)を表現しているものと二大別できるときで前者は上でも折り折りにふれるところがあつたわけである。しかし例文でもわかるように單にマス・ゴザイマスをつけるだけでなくハカツセンニオヨビマシタータタカツタ/クチガオオスギマスーシヤベリスギルVなどのようにS・F體では別の表現を用いていることは注意してよからう。これはS體をフオーマルな體と呼ぶにふさわしいものであらう。副詞のハアチラーアチ/コノヤ(ヨ)ウナーコンナVなどを對比してみるとS體の性格はますます肯づけよう。更にハコンザツーイリコム/シヤクヨウウーカリ/ヘイゼイーツネニ/ニツチウーマヒルVなどをみると(A)の表現であるハ大慶……ヨロコブ……。御覽ーミル/飛行スルートブVと同様である) 漢語的・文語的表現がS體の中核とな

つていることを知る。そのほかに例語に示さなかつたがハシカシナガラーケレドモVなどの用例もこれを示している。江戸から明治へと流れる日本語——ことに標準語的東京語——にS體が主體となつていつたらしいことは推測に難くないところである。(漢語的表現を用いた階層を考えてみよ。)敬稱・謙稱共に明治—大正—昭和とつづいてゐる表現といつてもよからう。なお丁寧ない方と考えられるハオルス。オテーテ(手) オテツダイーテツダイオハヤクーハヤク オハナシーハナシ オカキナラシーカキナラシ オザシキ(S・Fとも) オナーナ(名)Vなどのオをつけた美稱の言い方も多く用いられている。(既述のようにオ……ナサルも多い) またゴをつけてハゴユルリトーユルユルトゴハットーハット ゴヨウジンーヨウジン ゴコンレイ(S・F體とも) ゴケライーケライVなどもみられる。ここにもS體が主體となつて東京語の中核をつくりあげていつたらしいことがうなづけるのである。言語主體としてはこのようにS體を話す人々によつて江戸語から東京語へと展開していつたのであらう。

まとめ 以上でブラウンの會話集を通してみた江戸末の日本語素描はおわる。まだ假定表現や慣用句・返事・挨拶など明治の東京語へと受つがれた江戸語の實態の一端を示すに興味ある部分もあるがすべて割愛することにし他日を期することにした。

ごくわずかなブ氏の觀察をもととしてにわかに江戸と東京への國語の展開を論ずることはできないが私が別に發表した(『國語學31』)西澤一鳳のハ古風を守り町囃な物言い—大體京・大阪の

言葉をつめて短くいう言い方→Vに東京語の源となる江戸語の一つがあると思われそれと共通する面がこのZ氏の観察対象にもみられはしないだろうか。江戸詞が東京語に發展解消される過程を考えればこのZ氏の記録は充分尊重されてよからう。江戸語の東京語への展開は言語それ自身というよりも(いわゆる歐米語の流入など問題は諸々考えられるが)實は政治體制、文化の擔當など明治維新という半ブルジョワ革命の性格にふかいつながりがあることを見逃すことはできないのである。(S. S. 1956)

註

- 1 別の雜誌の近い號に出ると思ひます。猶語彙の中に「斧」が見えるのは同語が上方方言である事を考えて興味ふかい。
- 2 デゴザリマス〜ダという表現にS・F體があるのではない。ゴランナサレ〜ミナサイ／アガル〜タベルのように語彙・語法の廣い面においてである。S・Fの對照も見よ。
- 3 ローマナイズの部分と片假名の部分とにミスが目出づ。たとえば: A-no o ka-ta, de-ki na-ka-t-ta, wa-shi, so-no-o ha-na-shi カノオカタ デキナカタ カシ レノカハナシ など。
- 4 湯澤博士はシュ〜シは一定の語に限るらしいといわれそのうちの一語として衆〜シを示しているがZ氏ではコードモシウ(Shi-w)などのようにシウがのこされている。
- 5 馬場辰猪はXVII. *Are or ureu*, the personal pronouns of the third person, are seldom used. (後略)へとある。
- 6 八笑人にみられる例の中たとえばハ行衛がしれなんだが

いい所で逢た。V (名著全集) は文脈からすれば「あづまッ子」の言い方ではない筈である。

- 7 ナンダとナカツタは對立的でもマシ(セ)ナンダとナカツタは對立せず共に同じ江戸語として包括されていいものであることを強く示しておきたい。ナイに對するヌの消滅。ナカツタに對するナンダの消滅という過程において、ナカツタの丁寧はまだあらわれず、それまでのマシ(セ)ナンダを用いていた。そこでマシナンダが一番おわりまで江戸詞の中にこのつていたわけである。ナイの發生を考えれば(ナカツタを含めて)決して上層部から出たものでないことは確實である。
- 8 なお受身表現としてトラレタ(287)イワレマス〜イワルル(293)ガイセラルル(1057)などが少數みられる。
- 9 △○(前略)オナクナリナサレマシタ△シンダVのようにタ〜ダとなるのもふつう。
- 11 松村明先生「ませんでした考」を參照。
- 10 チェンバレン「第一活用」・置クの過去推量は△オイタロ / 現在・未來推量はオコー。「第二活用」食ベルはハ食ベタロー。食ベヨウVと擧げている。
- 12 馬場も認めているが例語にデゴザリマスを示しているのは暗示的であらう。
- 13 SはFより高位である。またテイルの表現では、S・F體ともにテイル〜テルとなつていない。(テルが江戸末ではごく一般的という)即ち△ヨクシツテイル(22)スンデイル(267)カイテアル(1036)ヨクニテイル(1053)Vなど。

14 例文中敬語の助動詞として「れる」の見えることには注意。江戸詞では必ずしも一般的ではない。

(参考) 拙論作製に主として用いたもの。

○東京語の性格(中村通夫・川田書房)

○江戸言葉の研究(湯澤幸吉郎・明治書院)

○江戸語東京語の研究(松村明・東京堂)

○日本文典初歩(馬場辰猪・國語學大系第二卷)

○A Handbook of colloquial Japanese, 1889 (第二版)(チャン

ハン・博聞社)

○A Short Grammar of the Japanese spoken Language. 1871.

(アストン)

紹介

監 金田一春彦
修 明解日本語アクセント辞典

東京語で「讀む」という動詞が頭高のアクセントであり、「白い」という形容詞が中高のアクセントを持つているということからは、これまでの辭書でも知ることができた。

しかし、「讀まない」という時には「ま」の部分が高くなり、「白く」という形では、「し」の部分にアクセントが來るということが一目でわかるのはこの辭典の特色である。

また、普通名詞か個有名詞かによるアクセントの相違は勿論、「五人が行く」と「五人行く」では、同じ「五人」でも、アクセ

ントに差があるといったような細かい點まで一々指摘しているのも親切である。

つまり、表現の實際に即しているという點で、この辭典は從來のものに見られない長所を有している。

しかも、各項を卷末の法則と對照することによつて、類型語のアクセントを知ることができるし、地方の人でも(特に京阪の人なら)自己のアクセントと對照して東京アクセントを把握し得るようになっているから、本書を自由に使いこなすことができれば、大變便利な辭典となるであらう。

勿論細部については異論もあるうが、とにかく、この種の辭典としては出色のものと言えよう。

なお、本辭典の成るについては、監修者金田一氏の適切なサジェスト、書肆三省堂の老大な資料という好條件もさることながら、その編集については、現早大副手秋永一枝氏の非常な努力があつたという。記して同氏の勞を多としたい。(三省堂刊。五百圓。)T